



「だから祈る・・・」

キリスト教センター長 ミカエル 藤倉 哲哉

いつのことだったか、社会で何かの混乱があったときか、どこかの国で紛争が起きたときか、きっかけがどんなできごとだったかはよく覚えていないのですが、私が世の中への苛立ちを覚えて「ひとは何のために祈るのか」「祈っても少しも変わらないのに」「神さまは何をしているの」と牧師である父に怒りをぶつけたことがありました。

すると、父は泣きながら「だから祈るんじゃないか」と答えたのです。一生でただ一度だけ見た父の涙でした。祈ってもどうにもならないと思っているのに、それがわかっている祈れというのは矛盾しているようで、私には納得できなかったことを覚えています。

祈りについて大切なのは「忘れずに繰り返す」ことです。キリスト教の信徒は毎週日曜日に教会で礼拝を捧げます。毎日の食事の際にも感謝の祈りを捧げます。なかには朝起きた時と夜寝る前にも祈りを捧げる人もあります。毎日のように、毎週のように繰り返して祈ります。

もちろん、誰かのため、何かのため、その時のためだけといった特別な祈りもありますが、多くの祈りは平凡で同じことの繰り返しです。しかし、平凡な繰り返しはとても大切で、繰り返していると忘れることはありません。もし、忘れてもすぐに思い出すことができます。家族や友だちなど大切な人のために祈る、あるいは家族や友だちが亡くなっても、それきりで忘れてしまうのではなく、機会をつくって祈ることで思い出し、長らく心の繋がりを保つことができるのです。

私たちは自分のことや誰か大切な人のこと、健康を求めて、学業・ビジネスの成功を求めて、お願いしたりお祈りしたりすることがあります。身近な祈りとでもいうべきものから、広く平和を求めて祈る、健全な社会の実現のために祈るなど、大きな問題についても祈ります。

ただ、世の中には一人ひとりではどうしても解決しようのないことがあります。大勢の人間が集まっても変わらないこともあります。いや、はっきり言えば、世の中は憤りを覚えるような、理不尽でどうしてもしようのない、そんなことばかりかも知れません。何の解決策も見つからず、怒りの矛先をどこに向ければいいのかかわからず苦しむこともあります。もしかしたら自分の利益だけを考えて、責任を取らない誰かのせいかも知れません。頂点でそんなことを繰り返している「ヤツ(ら)」を倒せば世の中が変わるに違いない、そう考えてちからで「ヤツ(ら)」を倒しても、また同じことをする別の「ヤツ(ら)」が必ず出てきます。

人の営みは万能ではありません。願ったことがすぐに実現するとは限らず、実現するまで長い時間を要することも多く、長い時間をかけたとして実現しないことも珍しくありません。そう考えると、人は簡単には実現しないからこそ祈りたくなるのかも知れません。お互いに人としての尊厳とかけがえのない命を守り、世界に平和が訪れる日を求めながら、「それでも祈る」のか、「だから祈る」のか、「祈る」とか「信じる」とは、そういうものではないでしょうか。



【世界平和のため】 ～ 争いをやめさせたまえ ～

真理と平和の源である全能の神よ、すべての人の心に平和を愛するまことの愛を燃やし、国々の交わりに携わる人びとに、平和を造り出す知恵を与え、主の愛を知る知識をこの世界に満たしてください。父と聖霊とともに世々に生き支配しておられるみ子イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン